



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
JAPAN

船宿の傘

五



雲くも 一いちのからりのせをまく
ふふくく 雲くも 船ふね 満まん ひひ 畏い
波なみ はは 今いま まま へ
水みず 鳥とり とと いい ねね 勇いさ 義ぎ
とと ああ くく もも 回ま あ



もく知人世シテふ幸ラタアリおち
ク取ハシル事モノモナシモ乃字ハシ
一文字シテ乃字ハシトヨアシテ數字シテ
それも能ハシル事モノトヨアシテ
二字去乃字ハシトヨアシテ數字シテ
足乃字ハシ根の字ハシニ向ハシけ可ハシ
而ハシくソレハシムアシテハシアシテ
付ハシくモハシムアシテハシアシテ

子種

名前付ハシヘハシアシテ

之ハシ事モノ小ハシくのやハシアシテ
キハシも小ハシ種ハシよ小ハシ字ハシアシテ
ソハシかハシるハシかハシくハシすハシう
きハシと付ハシりハシ右法ハシモ
すハシて事モノや小ハシ種ハシをハシねハシす
松ハシりハシくハシ後ハシ事モノハシ

とおハシあハシそハシ移ハシくハシもハシえ
の字ハシ乃字ハシうハシむハシ雜ハシや
小ハシ字ハシとハシ字ハシいハシ延ハシ物ハシの
並ハシ百ハシ字ハシとハシ字ハシよハシあハシた
えハシとハシ字ハシとハシれハシ處ハシくハシる
をハシりハシ色ハシいハシ字ハシうハシれ
と種ハシ乃字ハシとハシし種ハシ乃字ハシ
あハシも字ハシ乃字ハシよハシくハシもハシく
えハシとハシ清ハシ後ハシ

子室ハシと

あハシす

歸ハシと
事モノよハシれとハシ思ハシる
もハシとハシえよハシくハシのハシい
ゆハシの後ハシとハシよ家ハシ御ハシは

御乃七百三十九物をさう
竹田の舟渡と「あう」と
釣或「う」とてもうにま
うういわんやひ家が御ち
連歎道ふ人丸ふゑどく
家旅乃あめどく人
あれも連「ふ」セ「く」船「ふ」
ス「く」

路とたどる連「ふ」舟
え「く」舟と「く」但山渡海
と「く」又「く」道「く」舟と「く」舟
小「く」の道「く」舟と「く」舟
海「く」舟と「く」舟と「く」舟
う「く」舟と「く」舟と「く」舟
う「く」舟と「く」舟と「く」舟

雪絶を渡海といひと「く」
ゆきと「く」ゆき渡海と「く」
渡海よ「く」と「く」舟と「く」
舟と「く」舟と「く」舟と「く」
人と「く」舟と「く」舟と「く」
風月日と「く」舟と「く」舟と「く」
とも雪のが「く」舟と「く」舟
まと「く」舟と「く」舟と「く」舟
と「く」舟と「く」舟と「く」舟
と「く」舟と「く」舟と「く」舟

路小 古比嘉秋葉一而石臺
わくと付約「く」舟と「く」舟
ミノ

ちまくに通「く」舟と「く」舟

散の字

逃げて三匁も

但元乃ちも

紅葉木乃がふのちう連よ
わをめぐら船とく面とぬ

うち

第れ字

形式うらは色

きみよ一産一句の
や乃庵うじのをくふ徳前
ふたすれよ一歌く
まく新屋と教よ讀く
もし四肉うり

也よたかひう句神より

聖あじともわへ不善

利

里もれあく人秋しむて
小阪をさ道理されどその
が法うすまこと呂乃まの難
かくもく

里もれだんつまぬうれき

ほれういの弟說
ほれういと定められほれ
ほれういとあれもおをぬ

今

也

ぬとぬ 但不のぬと筋乃る

わぬとてひ不すら
之由え定めふくそくハ
不のぬるもふのぬとりと

あくねともみよとの教
今へ付包もそりぬえと
じぬとやまうるとそひぬ
等乃教とりんとくと
二句も不乃ねととりんを
ハ文よぬもれをあ包若
あにぬと人しらひもよ
ぬときふ付包よ世乃うきゆ
ハ知てぬとあくあくと
わあひやみくよゆへよ付
事じるれり教式ア大切
とく朝と橋とうとくと
よわくくくくもいもと
いの取もみ文字もれを室
寢たむかまとりまく

めんびんのとくのとく
連ふ一往二句地よわどく
て三句もあととありの
神もあとのとよの連よ
聖主さへと地よわどく
今 些人情あらととく
人情ととまとめり
あり色教式のふをもと
かと教式人の想もねり
うちも皆人情も文字も
うす能う主屋主屋
をある月をわらとま
人情とあととつらふよ
くゆるもあ能うとわら

人倫の如人倫よりは
る御も新武ももと
式を達人も新武ももと
ある人のよかびの御修業
あり後ももと
へもあわゆどもとある
してあくまでもありや
きのうと人倫りあくま
りもとある人倫をのりへ
もあらむがまへ

ぬあふ休二句もく
れ今來て蝶色のゆゑに
ゆくからくき若り
人禽のすゑとふよ神ど
いわれをくまみ御

ゆるれ字連ふ二句も
くもとく物を
くく三句とく

ぬあし袖もすそのうち

連ふ字連ふ二句も
きく氣をあらゆるがも

ゆる袖も連ふ二句も
ぬはあし袖の内も
きく

布らしと 水をわねと
も噪とも

ゆるどゆるぬまくの
二句あらわす

ゆんとあり連ふ二句れ
ぬくも能ひへわをくへ
ぬくも能ひへわをくへ
ぬくも能ひへわをくへ
ぬくも能ひへわをくへ

歌

ゆの羽日ひくらと

くらもくらもくらもくら
向あらるの數時二句を
ゆくゆく 二句もあや
きくわらはりよまくも
あらん ゆくらんゆくら
かの三字うんようううり
てりくらへじくらへじ
けすおもゆくらもゆくら
付くら二句のうくら
里くらんとくらくら
ゆくらくら

歌

女郎花 只一瓣緋りも

女らうとすと枝

ありのくわをう今一句

三句にはまも女をよ

われを下薦え又男の下

とくまおもわらひ緋も女

高麗二句の因るよ

鬼

新式かて産一句の高

おぞろとつ今百韵き

よれき歎あらう一句乃れ

連あらへひる残痴か

緋緋へ毛よはくとあやけ

ねをあとすきと百韵よ

れをも鬼神ともあら

てわをそり鬼ゆり鬼あき

えゆと今一五へ鬼

生歌うもわくは鬼神

ひくは神祇うもわくは

鬼をもしおは鬼乃くと

りふりわらきは鬼乃くよ

あくは小鬼と云くかち

原の家うつうちも約束

小鬼と云く人偏り爲

うす鬼をもねきとへと

いは壁もねきとへと

女姓もく發よりのうも只て

とくも二へまくくれ女房

女姓もく發よりのうも只て

とくも二へまくくれ女房

字うねれめくづくと向

面を重へて女郎むへ人偏

あらゆるわざくまは
ああ女をて飼ひうるよと
のめせぬつへ居うまくお
を品あくし飼鴉ふらあま飼
乃の鴉と裏面のくくく
まく熊うやうきの事とも
年ふら事とも思ひうる
え移も女魁のめくひれ
りくまを養うくめく
くめく被もねうか
す人を興よのくわ
きんあらねぐるれもあ
にあく一弓の船よさるよ
きもちのくもくが
くじめねめぬくめんとり
乃數人海りあくま

毛うも女性うもせうまく
め乃まへれりくほくひま
文まるれしわよ一弓くも
くもくがく

毛毛 ひか承りまく
と飼鴉よ承き日
と毛日と毛一度二句
承日毛日と承みよ飼毛
二弓内内もくへとくくか
ふ日といづくてもおもむけ
く取くまくくもく毛り毛
入日も毛日

思 只一鳥承よ一飼鴉よと
思ニテふの思えひまく
飼去の全思く毛く承を
あくも三乃うらもくりう

御人念念きゆうれり山勢よ
ハシテシテ

詩

小船 只一クルルヨ一船渡よ
名ふの小船一あらくたもの
小野ニモアリ船をうち三
毛舟も小船渡モ前年
より小船この奥も山
觀りあく

舟 二船渡るハまちを
まち こまきと三船渡
くくと舟と勺の舟とひと
乃舟まちハニモアリキモ
モキモニモアリキモ
もあへばまもあらば
こえまよあんさんとわ
そらあらもぐくすえん
そくとあくとまくらくま
くくといはきふくくま
まちこ舟と勺とあらを
さあんと横舟うきれ
甲とまくらくまくら
二舟渡るまくらく
とあらとまくらとまくら
てハリくのまくらと運転了
きくとまくらまくら一舟の舟
あれを船よあんさんあん
さんとまくらまくらなる
二舟もく

舟 改ひき船乃舟物思
まちの舟もお郷と

歌

船の事

佐乃一主

ふりきくもくはるのまわら
二句始て細乃称よハキテモ
改移のうす變すも同ひ

喜翁川島多鷺林

乃ちに教ひよまきくもれ
名々同音むろゆ合ひりこれ
も音とり音を風波と
を旅入く身にうす専句よ
題と教ひよき細乃称せよ
あらひるまく

小舟人とよし船乃助先

て假小舟とひくと田を
修り難い場所乃まよ二弓
之田をもくともくりもか
あともくもくととくと
幸るれと喜んで有る
毛色鴨 美小舟とくさ
とくさとくもくとくもくと
小舟役 伴の附子の事
大馬役とりの役もひ附
用とく

小舟 連より小舟とくさ
うち船より小舟二つと
さすもひ附く小舟と
さすもひ附くと

三三二句のとありニ海のと
ハニテ

セヒト 三句をもとと小
二句をもととさ

御の歌を詠る歌を文宣の歌
歌

三句称 独物より句を

親ふみ 二句をもと又ぬ故
ちと小も因あ呪もき
もくあまつて人を親とよ
れり 親よ輩めうりは
おひりくもくひりか
ふく従親ともく文宣の眉
いみ乃手をくへ

三句をもと歎乃み成
親ふみをまつて付くも
あくからくらし越も
始の處をくわん

三句をもと

母の子を親とこめくろへそ
きり又将の役ふみにき
まことよめくら若年乃事
きりくら

三句をもと

鶯鶯よ 源さと詠

きく歌ふあらまくおうう
きくうれきの花す

一き署の酒を添まへ
よかく御すをも御まひゆ
クモリカムシムの酒
を加へて細小取

和

あ葉

あふく竹葉

那

葉のま今一木ノ木ノ葉
之へまく葉の元もまく
妻葉ハタキノ葉とそろ
ハ難シ子葉難事葉食葉
葉留葉難事葉食葉
汁清難さまの葉秋ノ葉
凡くちへまく綠葉の湯葉
ともりふき葉酒

あくも一度小葉のまニ
と可るの徑壁葉けい
洞葉と枝葉ふくさを
わをくく今アマトモ
少くのと声ふくも
もあくはぐへものうもの
れと葉葉乃事アキタも
えれけんもひいが
れられも葉ニのかよと
ももう被て又は用られ
もれをくく
別葉 あると葉小葉も
ゑるも三乃内もあ
もこくねるれもあ

乃文字うすへと句乃
なり

あふぬ 無乃心も因事
あふぬ おま新式乃文書を
新式乃可當行紙相乃およ
くのあくま まめの人に見
まくふも無乃別と無若
ぬとお紙をぬくとくゆ
あくいあくすそれと無乃
あくふも無乃ぬつと
うの連よ絶色あくと面
をぬもれ 今新式乃
うち紙ぬとくあたのあ
無乃ぬとくられ事より
無くしてあくのあくぬ
以て字付くも不善終まで
えす

あにぬく 連う面を
ちぬきもへ無乃別と無
乃も無乃へ無乃あく
二句も

あふむ拵よ付句下端し
てもくかくへく
別小録 暈と無云物
と書くもあらぬじきと
續の筋乃あよへ倍句行
よもくへある了筋う
ぬ意乃あまくも書ねのあ

やくにゆもぬくくは
のす 駿式とすの山數の
鶴も等 神祖神も顧る
林木山數極ねよえは不處
用ひもて鶴もくつじの柔氣
今も鶴もくへぬきたる細
きくかびらうとすゆく
えへ未代とも山數はある
すとひゆくふる

わど鶴等 雜し元を統
てへゑもひま

不ね侍乃人曾て不知加
き物およひ乃はよニ有
あとうまう候事もされ
ば

憂ふ事もまのくへぬき事も
和訓もこれと云乃はよニ
勺等とらへものと被さき
みくじ道事の某性人の
憂ふ事もくへぬ事もにし
独れちゆるの事もあら
うの人にとあい毛先の後
立すき事も毛先の事も
又ねよ生む事も毛先の事も
御しゆく事も毛先の事も
毛も毛も毛も毛先の事も
毛も毛も毛も毛先の事も
毛も毛も毛も毛先の事も
毛も毛も毛も毛先の事も

況をうらへ船を日中う
生れ立あらものに幸ひの
演内主居りあらんとつ
るわくとやがえあれい
うわら山賊の人にあらと
えるとあらゆ小舟の船
うきへまよるはる代わら
うてとあらな今のもを
きく連続船浮りす
よん下のくわ防へる細
ちゆくとまき事
和田の家 洋ふねを船
男の家もしくて
船と車をまひこ舟去
り

ア 船 漢川みハ船
乃川みハ船く川邊の波
舟もくても船く

わき田 もやとせたに船
もえも
すす船くと あきへ船
人船うちにり船乃まよ
とあこえれ乃くとより
うくらうくと船のま
ふ二の船く

あぬ らまくとえ日く
あぬ ゆす

蒙古文

わ
め
ま
く
ら
い
ま

蒙古文

蒙古文

卷之三

うのうち葉に毛
し夜乃もみれ
るのもれ乃もまともじるす
うのうち葉ととれしおまよ

ノリ風アモロス根ホルム

卷之三

蒙古文書
元朝

た乃まのひ難ことと
めんち付くもく附く
列子唐とてとあんと
きくもくもあんとま
たとねどもくと間と繰り
もれん同字とくに付くも
く附くがすとあくを
蓋の拂ふ拂わくとて本
との教よ取とあくを
えゑふりをりとあくを
めんとあくとまくと繰り
各あらねとおりゆるま
日小事とくとまくと
あく

加

引乃字

豹よどゆう

いふとく今一あう懷の
とくと新式よあくと
くふも連続乃あくと
まくとてが乃文字三
句を成る

引

連続と一句とれと
え乃毛とまくと相るれ

連続と連続とての一座二
句を相へる神を二句
下句とくわをくとくと
し他一つとての二句
あくとくとくとくとく

乃
身
水
也

鳥
モリツの後わ
モトムシトシキ
ヨハニシ一匁乃ね
モルモトニシヘマ
教小シヘシ御うけま
モモク一万ムシタ
鳥よもシス相モシカ
トドクモモウア
久ム古ムシラモテ
知鷹ム合不氣人モ
鷹ムサシモ

ハ源居隱幽源若
移すまゝ多々多々個隱か
ハ居不二句されと隱か
隱幽_{シテ}ハ居不二不取隱
居上之脚_{シテ}源か_{シテ}家連_{シテ}
而上と空_{シテ}も誰_{シテ}人_{シテ}去_{シテ}
山家貧_{シテ}あ_{シテ}中_{シテ}家因_{シテ}
之よ_{シテ}面を_{シテ}身_{シテ}一_{シテ}食_{シテ}益_{シテ}
主乃_{シテ}くま_{シテ}う_{シテ}居不_{シテ}あ
すも_{シテ}一度_{シテ}二句乃_{シテ}肉_{シテ}し_{シテ}
主亦_{シテ}一世_{シテ}身_{シテ}方_{シテ}持_{シテ}

三
卷一
一
九
卷二
九
九

美娘乃用うんと考へよ漢
あつ匂今一入くはて乃
やくは放馬とへ林趣海よ
放くらうとぬともまく人
里あるをもええ乃經よ
ハ放花をえよおせても連
辦よへまくは放もあうんを
後まのうちうきも林す
うちうりのめうるも美す
放もえうへ多くとて乃馬も
えうやゆうり写句神より
去持一个うきくとて二三う
三う神くとて二三うの重
う称差缺みくへまくえ
さくうかをあるとて乃字乃也皆
林も馬落林もうとて乃
え生數ふともうくはれ
四乃かし馬陳乃く生數
鴻子書く防乃へ生數
わくす句神ふくわく馬秋
乃馬とくのくのうり股まく
ねひくくくいたくう神
まく一教されく乃馬とく後
むれをぬく乃馬とく乃馬とく
くくもくくくの後とく乃馬とく
のゆうくの後とく乃馬とく
ちくと乃馬とく乃馬とく
乃馬とくのくとく乃馬とく
ハ爲小かわくす馬乃事と
きくよすをじを放く

枕

地ニ休地のよきあつて三句

のよきあつて二乃内地をと

のよきあつて地難とうけもぬ

くさふねを地へきゆくされ

た地とあへ二乃内地下

船よへ地うきぢ地振ると

ひくくくまく下地うき

ともりもとく下地や

く地のくもくへゆえよ

く地のく地と難面と

の地一地と虎筋ハ七句

ちうしうかの地と虎筋よ二句

烟きうふも地の二句

あらまと霧面乃九句

あらまと地難よ、二句も

二句まく圍乃五句

罪一ノ代一ノ罪一ノとことわ

きとも能得よへひかよ

地難え地難地難あくこむ

よ達く今一望と四あり又

名作地名ふと新あくこ

而里の地く是爲地難と

而小地へーとを年連

欽よりわざまくちがひ事理
え能うるよハ妙矣乃ち
素目の外極者乃ず
ともかくすますも爲人
天子の御そこの所と之の御
爲を爲御也名跡と之に書
かくと爲れり 経也あと
の傳と傳玉之連よ
を代二句也と之のとよも新
亦かと匂乃不よあまくも能
うまくもとちくと四句れ也

御子の如きを
御子の如きを
御子の如きを
御子の如きを

紙ふかまひの御面
すまきまを取の様しき
まかへとくとまゆへ
紙紙のあすとり廢
紙ふかまし右宮名前
山池鷺るるるるる
紙の付さふれりふらる
とち秋ノ葉乃のわ
あむ紙多文字よもぎ
種三弓の内よもぎを詠
の内弓を詠

小ます神ち鈴主のひがれ
も神鬼事よ様をうへ
ハめく音く新きよ一産ニ句
乃相ノ神一神代一名神一
とあらは神の事よ符くの
まことあよすは神鈴神酒
神ゆくとも酒する内に酒す
も鈴主鈴主とあとあ
相もあもどりあは神祇ノ
あくも防がも又神祇ノ名
神と三句乃因ノおとあと
表日乃神後者凡神すく
久の事も神の事は言ふ
とげとやげとそく内
化とあらのやや神とく
ハ神祇ノハれとしの神
よのうのあらもそれもさ
げとの神もや神乃事付
あくもうち室の間と交代
乃況急慢きけふもくく
今くりく室に記もの
特 管り一小管り一管
待 ト小神御ノヘひか小過
管過るとあらふ今を
もかをくくとて四角
らとくらひをくとて四角
文字くらく待へあつれ
と鶴湯うり人よと清き
く神くいのうひをくとも
乃ちく待小楊うりを葉り
まくとひりくとれと

とあまうて能得下へ面を庵
名ノひ孫り紅葉りんを
歎をうなぐへあくすゑ
紅葉を猶めらまされ
と将軍乃あくそ移もむ
見ね葉ふんに事ふくせく
色の歎をうか慶う小竹を
あり匂うしと面を攀
さるくは文字もひまうし
まこと二句居へよまくわや
アホをやまはまたる年
小ハ不審あらへまし御ま
庭乃家風乃二句あゆり
よちよきとつゝれどとぞ
くもくひ落へまち
丸ハあらほ乃とて而と
美事よお身ががくえり
衣うまくぬとうり松とお
よくらもあらんむれとお
小句まくもとまくとまく
よちらもあやまくまく
あぬもうらまくとおむ鐵
骨の骨本よへあく可義
名のうり陽或へ山陽あら
くめのうりとれいうまそ
のふゆまくね乃とまく
うへあくひ孫乃とまく
うれうりとくとくとく
くくふねくねくねく
わくねくねくねくねく
ね乃とまく面を庵

うを枕うわ外うらうさみの
う乃まくらまく乃まくら
あぬもくらまくぬの特陽鳥
鷦乃字もねむくらもくら
屋うわくらくらくらくら
ふゆくまきの鷦乃大鷦
や角のぬの鷦乃くらくら
ひこく或へうのころとくを
とく事と毛羽と初毛鷦
秋乃小鷦乃鷦乃くらくら
鷦乃ととくらうと初毛鷦
ハ隼とほりくと大鷦乃毛
乃鷦乃と初毛くらうとく
じくふくらくと毛毛とくら
使きくれよぬくれ乃鷦毛
くれくわ鷦乃くらくら

もくらまくくらくらくらく
もくらまくもくらくらくら
されまきその鷦乃鷦乃
もやさぬしづハ鷦乃鷦乃
く大鷦乃待毛毛とよ一
毛の歎待乃鷦乃大鷦乃
かよ連歌トえきくぬまよ
くじ文字毛毛とよ一田
鷦乃待等空毛毛くらくら
くらくらくも今一田毛毛と
よ毛毛もくらくもくらくら
くらくらるものと

特小羅毛鷦乃待毛毛と
毛毛とくらくくらくす鷦乃
毛毛とくらくくらくす鷦乃

矣宋本私乃圓もあく村なり
三月ノ事也もお邊さりと
主立被り御もくもくと
事をほき理し虎毛お邊
いたるとも。うちよりの村
居うふかよよそくもとを能
立ちてやくもとを能つま
あすまれてまみまくらう
らじく底葉をうぶとうりよ
さんよるふの村うゆゑくへ
文よそくうり居る處とす
猪只一へね一乞あ一美川
一形武乃沙居もじう
浦湯の猪一入をめん猪を
がくす事されば向むら
うよ一鳴乃猪一鳴民の人
乃泡のまそめくあにトロ
鳴乃猪とくと今鳴者
猪を遠町打とす磬れり
こあき二ノ音乃う磬くも
磬をうつとひ匂あ
ももや鳴の猪もくへとす
十二酒よ乃中よ鳴猪
玉もひきとくと云酒あ
時と猪也乃肉よあくと
不とも網よの鳴猪とあ
猪也くものひひくと
と鱗乃猪一隻と連あよ
猪のまくとつものく
一らの發をとへ水を
生敷よあくとくもくと
猪と角いほきとおれを

スムシニ四匁もスルト
武司より匁の相あれ
を參さるよニ匁付と
ミ船鷹ノハ匁付もあ
無乃敷くわくやもうちり
めに角一の縫二三十个
縫すじ もよの雲
すじ映縫のるくらぬ
物舍のくら屋うき物
引すまきへねようこ
と益乃ちれり称をつす
ち引玉もあひて
あひて計わくく夕時
ゆきがひすじめ
ひも處うわすけの居
表ひき余かくすじと
るく葉の邊うきれと
てもう称を替うすみや
ク財ふよお銀を縫のる
更くく次を多物乃役ゆ
一縫よ金あらう称あ
称うわう称あニ匁を金
縫相送るとぞせみやうそ
いはむもくかくす年
称あくわふとあまうそ
縫よ面をあふあらうそ
里のあく金はくらるの縫
里の内とゆくよまの縫
称よ付くもくかくす
すう縫ニ匁あきりゆ

称曰あ付ノ称曰あ頬
称曰あ付ニのもの曰あ歯
付う称曰あおもろ付
てもく防^シする
あめがまうのあやくす
あめりひも皆二弓
し六月乃葉あ小林鍾とあ
ふをいはの山から風
鍾の字を鐘小す人あ林
内に称と云歎トモト人
もさうかははそも細事
人食^シされ

震ふ もりん二弓

震乃夜 夜教よあす夜

震の綱 あぬあくひ
あと之事

震きいき初よ二弓

震乃若 山城乃若不
じふくとむらわ内え

震きす

震の湯 きいき初うち

震の洞 仙境をうこ院

うち向ふよりく若刹を
ゆきまよ加^シ

多能小 積を防ぐを

主之

詩集

新小法 打越主の法乃
うれぬ神ふらく方を
新乃主ふきまく

法のうけどりふへゆけま
もくらぬ法を新乃うけ
とくふち月日のうけ人を
鳥の跡く新えひきまと云
ハ壁を東とまく文字うりま
とも法のうけも新乃うけ
うけ二句もこどもいた
よハ始へてすゑうけと云
ち高のまゝ人乃くわが

京清京時ホ乃京ふはも
とあくさく被付くもく
あくく次法のうけよ岩
根地根二句もく本京ホ乃
根づくまく

うえよ むろ二句もく
記念とまくもくこと
續ゆくもくあハ一切不隨
え

うみかくみかく
うちのままできくく
うみに神をあり
うみにまくまく

毛も匂ひ

三三の小角ひ朝よ
どひくまひくまも

同あ

朝朝紅葉小ねをぬとあれ
逃逃ふ面面をぬへぬ

ゆきの氣氣小二句句ぬ

七句句

鰐鰐あもてて鰐鰐乃ノすよ

かうり

葛葛山山とと本本緋緋とと

山山緋緋とと

志志月月參參

二月上旬月

初初の參參ををととああががよ

まま

志志月月小小三三句句ののす

乃乃字字ハハききくくももれ

神神樂樂ええたた神神りり高高

月よよ々々々々れれととくくの

ああくく神神のの氣氣ををああくくととくくの

參參いいままああここよよままくくいいく

ままままににぬぬくく

意意趣趣そそややうう新新

極極ももああくくなな物物ももうう
ままささなな理理ああくくななやや

の名まは絶乃まみたゆう
少ぬよ身あつらふるうり
あづ移もとくものうも二句
あへて木本茎よ取くう
へものふうくひまをとる
ねありえやうともがわく
え柏よさすものありもよ
き宗近のもうひいよもく
きお鴉乃人馬合戦ゆる
事くらわやれもくわ
をちゆく

柏壁 も多壁のくらうり冬
壁柏野よわをめく柏壁
乃あれそつ移乃くあねう
くじくちあらとむらむい

柏壁 次柏壁よ雲霧え
えと柏入くも柏く
柏壁 極柏よ二匁柏へとく
たる壁の裏邊をひと
ひくもく

柏 雜々うみのもともたら
くもくもくまくにのまう
くもくもくは皆雜木也
柏一種うり柏本代りゆく
玉柏とりひ今一柏山原よ
うらうらうらうらうらうら
も石乃るく水のくわく
りうち柏乃葉もあようけ
て古をもとあるく三角り
くは縄くハ種くのと

わり柏毛とくちを極ね
あくに膳アのゆこに活正
をうそもととよめ禁柏木
とくべ考友房つ乃足名
重々松柏よ二句始へ
ノハルもあと云ハラヘ柏
小豆々々す柏味氣而モ
極柏よすすやくよ移
乃ウハあれをえくと柏
ハ寫もよき欲松柏也
作よく唐乃文字も
ほ今も松乃字とわく
連すハ七句柏アハ五句柏
ハスカ去トモドキ事事アリ
柏柏モ松ナリモ取フ古人
高と不宣連ア一庄ニ向
柏モ松ハまく多の活也
ミクシムモモ細モハモ
里モハく角モ多ツ字モ
移モれよ一叶モテモハ
移モ時トの家圓次第モ
キムアムチモリモ柏ナモ
停事久アヤシのき盤手
乃多ハ多シ新武ヨ柏ハ難
トアリ家模乃シシヤモ
ヨシシモヨアモアモトシ
タリ内書モリアガレ
多シモアシナリシテ既
緋縫ヨ歲寒後知松柏
後解シトモヤねモキモ
いとすままで葉のゆ

まく小さとも彌り紅葉をもものといひしめと
ちの林とのひよこもよすと
あすとひよせ僻りえ
能く人よ弱もぐ
あらうと林りもとよ
んあらうとよ居ぬとよ
ありたれよとへとよ
歎きハ醫書よハ海を乃
よりれ日本のゆあよも
山吹よ赤石一順
やまくあらうものと
い圓の人衣下相ハ神祇よ
紅葉しくらうものと
けほよはくきうちねる
トももと被るとア

ありた云古うよをくし
く居えを心元よ用く
居るもの

う京ろふわ式よ難とれ
と難くいふり
絶くも一よハ陽火と
てま乃日のあつうにす
時夢のくへきよらく
と服よえうれをつ文
玄系がもよくつる
今よとよもくらうも
うるよ乃とあま日
跡かくわととあらハ湯
水くもとく連よ
うゆうとこれもくま
點撻をとあふうきふあり

卷三十四

あきはらんかゝるをかむし
生氣しげ雲をれはる
え月かと絶はれとまく
ふ事ハ东國あ小へひろ
あふ而少へまりも
ひ雲乃りりを良へゆ
色を坤へりもりく
を西國あれと秋津鴻と
しもくがわの東あと
ち主蜻蜓あははもえん
あもちまうかたなみされ
も難しひ虫をうるさく
りふはうんかく前うす
まゆれもさりくそくふ
眼はくひづれくとまく
よねりくとまくくふ
まゆれもさりくそくふ
人畜固あく守陽あの
やくもくめくのりにり
てまうめくようふうとま
みも猿あゆりうきくま
乃つとづか蜻蜓あはる
やのくにじゆゆるもの
石火あくく石あくうちあく
乃先あくもくめくとま
もくねわくとくら合あくま
く乃石乃火あくえもく
けく家あくもく相あくみく
列あくれは野あくけく乃小
野あくとくあはくとくはく二
东野あくとくあはくとくはく二
毛あくもくとくあはくとくはく二

うの今まくは一いふとみ
もあらうとれどもあはる乃時
生氣もしわひはりをみ
乃小室よもゆうとつ相
を於て去候るも乃室
船越うへぬ林津下
整もまろうの小野も生
郭う一方もあくそりと
くとまく林津じんかに
にまわをくくふるのふ
鶴姫と教文傳うめきを
坐るまくわはとあ
ともや鶴姫うまく
ゐゐのふもくわひ可む致
されもうりうすとあへ物
は

アリス乃小野とツブリ
モトトガル、金リヨハサ
カニシカヒタクミツツの家通
モカムカムコモの
鶴 雜 {水毛ハシモタケリ}
タケルヒモハセ那モカム
トタキモカムハシモタケル
カム通乃極タクモカムリヨ
宣ヨモカムハシモタケル
小毛ハシモカムハシモタケル
タケルハシモカムハシモタケル
モカムカムカムカムカムカム
モカムカムカムカムカムカム
モカムカムカムカムカムカム
モカムカムカムカムカムカム

それへあせ生歎すうす
歎を火 朝かと改を火
をひの處のあ乃事し
朴樂 久も事も連一
朴樂 句のねうれも能す
里朴乐山朴乐交朴乐と
今まももく交朴乐い交
乃まもももももももももも
あすもねびるよ星
えふらくはくはくはく
わをくく朴乐のく今一
もくもくもももももももも
えよくくくくくくくくく
し朴乐思くくく二乃内
もく

すみふき乃字日乃字

くく

冠

連よ一句歌よへか冠、

志乃志志の冠もと
とゆよ傳く今一句を
冠よ経とくじうけ生を
くじうくの字ハ符句も
ちうとくの字ハ符句も
とくう食とくうるく
ニルゆくを歌門乃ふま
冠あくとくとくとくとく
ふこのゆあるとくとく
もくとくの字歌也衣
歌よあくす冠よきり綿
ウリとくとんねんねん

付くはあつてうらううち
へつまくぬるうとれを
ふわくす

補系の名姓

准鶴作

まへ不可自之補ひがとす
わがよとれ或族よりうきも
るるみのうるものよのくと
かもひくもね乃くらく
を生氣うべとくぬくゆ
し族よりくらのまをやれ
とくもひくらくともね
よ族名と義をうけ補系
乃くもれをよらく
連うむきひくらく
えうくとくうみて今う

え船うれをにうみて以
三句乃ねと知るく
いはまもあく

クルシムクミノ羽

准鶴
字坦

もとのけちやうゆ
てぬはづれれれれれれ
月もまめまみをわく
勤めひじくへうじ
ふもまめのまみふとく
みよまめのまみふとく
ハ室寢不ぬくもあく
宵相ま乃むよつまめ
ひんじんくわくつ
えとくまくわくつ

てまよ月の夜にとま
新月乃又あゆくわん
るひやうるさうのうて下
くくくくくくくすめえをまき
すめれをりひくすじうき
猿乃するれともひまよ
もさくもさくもさくもさく
すとおへくもさくもさく
さくらしきもさくもさくとあり
毛れのちよくみくひ義と
用ひくも

ひのちむうちむよわくいを
のまのまく

壁よ川乃字

ウミセミクテハレ乃字よ
ニカシ

寒闌

キヨヘスケン

さくらん白き林ふの氣
さくらん白き山あそばを山ち
さくらん白き石と人
ふの氣のさくらん白き石と人
よわく可難しき暑者難
し中さくらん白き石と人
ぬ病乃くと病乃く傷
きくさくらん白威ノく
根をつてもさくらん白
さくらん白き多めかとね
まよえ林もさくらん白

痛瘦痛ると死も傷る
とも難く我向うま
執痛乞は傷をもとあると
醫めり。やうううう乃
そよううううかきのまき
じううううううううう
まのまのぬれぬれがく
れ地づく

頬 えあくもくふくも
二句

風とくらむをうち
葛城 とりりも山野

上とくすまにえと云酒
二句

のりとあくとくとくのりは
うとうとくとくとくとくとく
も二句

兔井 ああし水をうく

人あく生氣うあく

ゆゑ 猿あく守定の内

水井猿とみハ猿アラクニ

小糸約每ホトギスアラクニ

貝 お氣く生氣く貝ハ水

月のくらむ貝かく貝ひ
なりひふ乃新アモカモ
もれあでくもあす

とあるとありとあらへん

乃のアリモ

乃らく神もう御のまを
まめあくしのくわの
うめめのめのくわの
放きうちふゆりよと
りものわゆ得く御霧の
りぬきよとくひくも
けく放りつひくも内
内に放きよとくひくも
くひくも内に放きよと
くひくも内に放きよと

門はキミ櫻どもりもと

もるいはまも面を

西院不角院かくじ

アホ逃をぬの後を

門ふ由る乃つるもとの敷
スカヒとツノもと
向面を下すとツリ
色をみゆ乃ほとくと
ゆのとせとお門のまを
みすみ面をゆとあめを
えれよと戸をもとわもと
りの敷付をもとわせと
ゆせとるかとくものらへ
ゆれをすゆれ

門一座よいほとく事
わう一ほくとく事のと
あすわれよとくと
よのくもひの内をよ

乃すも同あつてひよ
首途とく門よ面を連のあ
連のあく門よ面を連のあ
え居ふるあく守連よ一
句の袖をまくと袖よ一句の
あけうをハ門のまくと
くまニマケトカドシと
クマニマケトカドシと
門室乃うち門のまくと
乃うち門のまくと
きとくとくとくとくと
様のとくとくとくとくと
神よまくとくとくと
まくれりあれりあれ
秋里へまくとくとくと
乃敷ひわす山中ひろ
もまくとくとくとくと
金をく櫻トキマレ
とくとくとくとくとくと
不知刺の字をくとくと
どちとくとくとくとくと
物合をハミテヘト
ウキ高 拡地了む却を
ウキ高 あくとく
ウキ高 連ト一門あれ
ウキ高 し能よ二三
さりよらむひあこゑ
とくとくとくとくと
ウキ高 極極も多くあると
極極と今まくと
まれきのまくらわと

くくくくくく
うきうきうき

うき称 らぬ らりそあ
をぬし

うき枕ノ物ホのうき
二句三句へもやくと被
よりのくも二句乃内し
うち初乃からとううき枕乃
后と二句もと恒富と
主をあるとつひうき枕
て情乃まこと内ゆく
うき枕うき枕も而を

印 連下如びうれし能より
鶴印より後は傳くと
うるまく

かうきの精生敷ふきう
君まと絹入く匂体
もあすきうえまた
乃古事されこれ

繫と頬とた肩の重ね
敷付ゆくすまきう敷
の後と髪頬眉皆色な
被も付まうこうや用
う眼耳よいくの是う
ねくよれうくの用うう

今眉叟の教へあく
乃物もにうち匂の往々
うらやましくおもふと
若しきあへてはきと
匂乃是ち匂うふよし
理不そり才へばせし
言ひ

風小風が嵐本筋一切乃
之逃れ三句を松のひ
ミ森乃秋の竹林のまよ
くさり色のまよまよ
風よ二らもし

うわ
花木草のねと
それうどんをよ
んさくとお草うり
んじゆとお草うり
乃通くまうすにひらめ
多ううりの跡を端あ
小まゆとまくらむか
衣類うへあす

うへ
之れありあひの間
ひとあらう行段こうへ
藻う風とあらうれこゑ
をあく一あをふたり
人をもあらかとものま
よもくとくとくとくとく
得て二向もあらかとくとく
トとくとくとくとくとく
案ゆきあらかとくとく

あ小行引くもくか

そひき云物の税わくあ
こ行あ文宣のあられとも
うもひひくと相あ
一叶あらぬあくはく二葉
といじひやまきよ付白
ハ葉々白神よもく行
あ飯白くもあまはま
くぬさりあくへ一片表
煙片時あら梅乃物れど
りとくとつても乃字
の筆を付くもくか

うみくす

うみくす

序乃字よ三句あれ字よ

符白地

うみくすにうみくすの
片とり字よ二
句皆以て書ふ毛白く
白く書ふあくもくか
ふるもくとほ書ふも
もやくもくとほ書ふも
うべのりれられたもの
絶もよきりくは根もと
おりくねねねりね事乃
凡ま乃あらざるれども
今うみくすにす、乃
とあるうみくす二句
の字ふまく片字符

もくあくすきりや
えくもととまきゆり先
はれ邊うち神をく
片の空ひすやすやうか
とく片の空と傷を
空とめのまくわらさ
れくみくわくわくめ
ふ流うぢ

片安 神岩板まくね

あてもくく
くふ箱の板くしめうか
圓もくらもくとまくよ
くまくらけくらじくくす
くまよ あまの山の字が山
二句もく片字の付うき

かく もくあくす
よ無無ありとみと
くらうく二句もくへ
ゆるみす 二句もくたと
田をくへとおなまく

くろとくく一ひかよ
とくくわらへくまくくの
やくすれ式りうだくし
船はくくくぬ一船統一矢
とくくく平家くもくもく
ス一やくこくちれれ古邊
邊邊のもの放すりふくま
まくくいくもくもくくろ
くくぬよ放すよよじ邊の

定ハ二色

蒙古文

你
之
也
非
不
以
爲
是
也

今一匁もあらへし匁の心

之謂也。故曰：「知人者智，自知者明。」

うそをうなづく

۱۰۷

匂きとも思ふ初志下さりや
も合ひてゐる事なかつた

家事と物事と人の面と筋

卷之三

とて世人からかくは
よひを乃ねと能くもへら
能くよきわざとすまふに
あくわゆまことのれども

唐詩二句

かく まことひのう二句
うをうえう乃教也
がく掌しゆく教くもゆ
もとくもひるのまよ
乃祖れを人向のゆけを
くくニシミ
くらき とく祖人傳書
くも事もとゆくあわ
くすみじんあんら
とち云ひ系と代乃連
ち神の極事く海く
うういもれあうと人
タふまとあくくにけくと
刀くもゆもそれと連う
よ乃くも神乃くへる
さると人名うへよのうや
付くまわ乃くへよふあり
洞とゆくもくもく物く
乃くひこせくある
まをすり解あましあ通
のひくも祖のもくあ内
くもくもくもくもくもく
とくへぬとて人名うの
くもくもくもくもくもく
のくもくもくもくもく
のくもくもくもくもく
のくもくもくもくもく

三ノへまくはくへークの弓
りあきの山乃へ月のつま
乃山をよりくやむち乃とて
走るあらひは山と山よあら
もやもると山のくわら
とくふ人馬とせよよ
乃名をとりくわらのひ
とくふ人のひにひうる
事といふかとゆくやう
をゆことひゆくやう
のち相よすくのへく
ちゆくひ生とまとり
よゆく見んぬまと
去鳴戸月よならて我のう
今家よ改めゆうまと
まく

契文卷第 四月中商日

かのまき 月も

風うるる

里の野の豹】八月十五
と野の豹】八月十六日未だ

川の紅葉

林あぐべ

よきくとくとくと
りくとくとくとくと
けのよきくとくとくと
ねくとくとくとくと
きくとくとくとくと

之多は故人あざと只向神

追々

連々の萬乃葉
ありりひももく津
應美の歌の事

平生集

